

平成 31 年度入試問題（美術）出題の意図

問題 雪舟等楊筆「秋冬山水図・冬景図」（東京国立博物館蔵 15 世紀末～16 世紀初 紙本墨画 二幅のうち一幅 縦 47.7cm×横 30.2cm）について、下記の問題に答えなさい。

- (1) この作品では何がどのように描かれていますか。モチーフや構図等に注目しながら 300 字以内で述べなさい。
- (2) この作品では冬景色の情感を表現するため、作者はどのような点を工夫して描いたと思いますか。墨の濃淡や筆のタッチ等に注目しながら、あなたの考えを 400 字以内で述べなさい。

(1) 雪舟等楊筆「秋冬山水図・冬景図」のモチーフや構図等に注目しながら、何がどのように描かれているのかを指摘させることにより、作品に対する観察力を判断する。

本作品は近景である川岸が画面右下に配されており、そこから左上へ向かって坂道を登る人物が描かれている。その先には中景となる楼閣がどっしりした姿で配され、画面全体に安定感を与えている。楼閣の下方には迫り出す岩壁が、右方にはゴツゴツとした岩塊と 2 組の木立が配されている。画面中央には濃墨線が直立しているが、この線は画面右奥に聳え立つ断崖の輪郭線と考えられる。遠景と中・近景を画面中央で仕切る大胆な構図は鑑賞者の意表をついた表現である。この断崖の上方は余白となっており、大気と一体化した霞と推測される。断崖の奥には雪の積もった遠山が淡く浮かび上がっている。

以上のような点が具体的かつ的確に表現されているかを評価の観点とする。

(2) 作者が冬景色の情感を表現するため、どのような点を工夫したのかについて推測させることで、作品に対する考察力を判断する。

この作品は着彩が施されない水墨画であるため、墨の濃淡やぼかし、筆のタッチによって、冬山における光の当たり方や遠近感、岩山や樹木等の質感が巧みに表現されている。例えば、岩山の下部は濃い墨で影を描くが、上部は輪郭線のみで内部を塗り残し、光が当たっていることを表現している。また、画面上方は薄い墨を刷くことによって、寒々しい冬の大きさを鑑賞者に想像させる。左奥の遠山は薄墨で輪郭線を引き、内部を白く残すことで、淡く浮かび上がる雪山の様子を表現している。岩山の輪郭線は濃く、鋭く、抑揚ある濃墨線で描かれており、画面に力強さや躍動感を与えている。岩肌は短い直線や掠れた線を引き重ねており、岩のゴツゴツした質感や峻厳さが強調されている。画面右側には、屈曲した幹に鋭い枝葉をつけた冬枯れの木立が描かれ、厳しい寒さを演出している。これらの表現を通して、本作品からはピンと張りつめた冷たい空気感や大自然における冬山の厳しさ、その中を歩む登場人物の心情が鑑賞者に伝わってくる。

以上のような点が具体的かつ的確に表現されているかを評価の観点とする。

画像・作品データの出典

『高校生の美術』（日本文教出版 平成 29 年 1 月）

『日本美術全集 第 9 巻 室町時代 水墨画とやまと絵』（島尾新責任編集 小学館 2014 年 10 月）

『日本美術図解事典』（守屋正彦他監修 東京美術 2011 年 9 月）